

## 外邦図研究の継続にむけて

小林 茂

2008年度は、外邦図研究があらたな段階に達したことを感じさせる年となった。

8月には日本国際地図学会大会でシンポジウム「外邦図の集成と多面的活用—アジア太平洋地域の地理情報の応用をめざして—」を開催した。2004年秋に日本地理学会大会（広島大学）で開催したシンポジウム「『外邦図』の基礎的研究—旧日本軍が作製したアジア太平洋地域の地図の活用をめざして—」以後、大学所蔵の外邦図コレクションの目録作成、外邦図デジタルアーカイブの稼働など、大きな進歩を背景に、つくば市の国土地理院で、多数の参加者を得て開催できたことは、外邦図の存在が地図学界でも一定の認識を得たことを示している。

また、これに並行して、日本国際地図学会の学術雑誌『地図』（46巻3号）に外邦図デジタルアーカイブの作成と課題に関する論文も掲載された。外邦図の研究では目録作成や資料調査など基礎的な作業が多かったが、そうした作業を基礎にこれから本格的な論文が発表されていくことが期待される。

あわせて重要なのは、研究成果公開促進費（学術書）の申請が採択され、『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』（大阪大学出版会、512頁）を刊行できたことである。これには、近年の外邦図研究の成果だけでなく、入手が容易でなかった、清水靖夫氏や長岡正利氏によるパイオニア的論文が大幅に加筆されて掲載されることになった。今後は海外も含め、研究者や地図愛好者にひろく参照されることが期待される。

さらに言及しておきたいのは、『外邦測量沿革史 草稿』の復刻（不二出版）である。一部のリプリント（ユニコンエンタプライズ社、1979年）により、その存在はひろく知られていたが、不二出版会長の船橋治氏の長年の追跡によって全容が判明し、これを容易に参照できることになった。現存する地図の検討が主であった外邦図研究が、作製の経緯や組織、技術についても本格的に展開する足がかりが得られたといつてよい。

このような成果がえられた現在、それをふまえて、今後の外邦図研究を考える必要があるが、研究開始当時をふりかえってみると、数年で終了すると思われたのが、進行とともに問題領域が拡大し、サブテーマが発展していることがわかる。このひとつである日本軍撮影の空中写真を考えても、資料の収集から分析まで短期間で終了できそうな気配はなく、継続的な取り組みが必要であることに気づく。研究の展開とともに、課題も展開し、本格的な成果がえられるまでさらに時間がかかるというわけである。

研究の終了まで、まだ何年もかかるということになると、シニアの研究者だけでは手におえず、若手の参入が必要であり、世代交代も考えておかねばならない。外邦図デジタルアーカイブの維持管理にくわえて、集めた資料の保管や利用についても、長期的な展望が必要だ。研究の発展は望ましいが、それが継続し、さらには首尾よく収束できる仕掛けも考えておくべきではないかと思いはじめている。